



日本共産党・そねはじめレポート とうきょう民報おりにこみ版

2011年 11月2日発行 第 19 号

そねはじめ事務所
114-0032
北区中十条2-11-6
Tel:3907-1135
Fax:3906-3225

都議会2大政党が議長ポストめぐり泥仕合 “政争の愚”やめ都民の予算と災害対策見直しの論戦を

●「ケンカ」の影で「五輪招致」は仲良く決議

都議会議長ポストをめぐり和田宗春議長（北区選出）を擁する民主党と自民党・公明党で対立、会期を延ばし議長不信任決議まで強行しても決着がつかずにいます。

マスコミもへきえきとして都政の報道は減っていますが、二大政党が都民生活とほど遠い争いに終始している一方で、都民の8割が反対の五輪招致だけは、仲良く石原知事に賛成の決議を上げているのが実態です。

これで開催地決定まで2年間は、四千億円の五輪基金の都民活用が困難になり、かたや東京五輪を口実に高速環状道路や湾岸開発、スーパー堤防など巨大開発ゴリ押しが心配になります。

●北区はずさんな公共工事でくり返し被害を受けている！



浮間スーパー堤防の水害、昨年的高速王子線工事が原因と思われる石神井川氾濫など、大型公共工事で理不尽な犠牲をこうむっている北区民として放置できない問題です。

全国一豊かな財政を本気で活用すれば、都内流通食品の放射線測定システムをはじめ、自然エネルギーの大量普及支援、住宅耐震工事助成の抜本拡充などで革新都政当時のように全国のモデルとなれることを思うと悔しさがつのります。

●来年度予算見積もり間もなく発表

そねはじめ前都議は共産党都議団とともに、まもなく発表の来年度東京都予算見積りと災害対策の見直し計画を、徹底分析し、都民要望に応えさせるため全力で挑みます。

浮間水害問題で国に堤防の不備を認めさせたそね

はじめ前都議(中央)と住みよい浮間をめざす会の皆さん

◆北区から今年最後の救援ボランティア・11月14日出発で支援物資搬送

3月11日の東北大震災発生以来、北区の共産党あげての被災地救援に取り組んできました。11月14日早朝出発（予定）で今年最後・7回目の支援物資搬送を行う計画です。

今回は特にお米の支援に絞って提供を呼びかけています。ご協力をお願いします。

北社保病院がドクターズヘリ導入を表明

■病院を存続・拡充させる会との懇談で明らかに

東日本大震災から半年後の9月、北社保病院を拡充させる会役員が同病院を訪問し、平沢事務部長ら幹部職員と懇談しました。

病院側から、3月震災時、女川町立病院の委託準備中の医療スタッフが現地で被災し、海岸から10メートルの崖上にある同病院の1階にまで津波が押し寄せた経験などが話されました。またこの経験から東電からの送電が止まっても自力で発電する機能を整備、また緊急時患者搬送のため、急きょドクターズヘリの購入を決定したことを明らかにしました。第3次救急・救命機能の整備とあわせて、災害に強い病院への意欲は大いに期待されるそうです。



99%の国民運動が全国で..

10-23 青年集会に4800人、福島脱原発集会には1万人



反貧困の青年集会が10月23日に明治公園で開かれ、北区からの若者による自転車などのアピールを含めて4800人の参加者が、思い思いの個性的なアピールでパレードを行いました。

また10月30日には、福島市の「四季の里」に1万人以上が全国から駆けつけ、「なくせ！原発・安心して住み続けられる福島を！」の大集会が行われました。

「原発なくすべき」の世論は国の原子力安全委員会の調査でも98%、反貧困の若者の叫びはニューヨークのウォール街を皮切りに「富の半分を独占する1%の富裕層より99%の貧困層を守れ」をスローガンとしているように、圧倒的多数者を代表する運動として大きな成功をおさめました。しかし各新聞テレビは、ほとんどまともに報道しませんでした。

◆◆◆区議団主催の内部被爆問題学習会◆◆◆

*日時:11月23日13時半赤羽会館

*講師:矢ヶ崎克馬氏(琉球大名誉教授)

そねはじめ交友録<その十三> 描く事の面白さを教えてくれた 砂場(稲荷台小)、両角(文京二中)先生

小学校3年間を北九州の門司で過ごし、4年の春に板橋区稲荷台小学校(国鉄十条アパートそばの高台にありアパート取り壊し時に廃校)に転校しました。

図工の時間、初めての水彩絵の具に戸惑いながら描いたのは母と行った高島屋の大きな天女像。塗れば塗るほど絵が汚れてついに仕上がりませんでした。

しかし翌週の図工で校庭から描いた木造の家は、青空を背景にきれいに映えていました。3週目は自衛隊十条駐屯地の煉瓦倉庫を描き、他の子が終わっても遅くまで残って一個ずつの煉瓦を描きあげました。さらに次のデザイン画で亀の甲を描いたら図工の砂場先生がいきなり展覧会に出品しました。5年生の夏に転校するまでの1年余、砂場先生の授業の楽しさが何故記憶に鮮明なのか、我ながら不思議です。

文京二中では両角先生が美術担任でしたが、生徒には「厳しい」と敬遠されていました。画用紙でくるくる巻いた立体を作りデッサンしたとき、「画用紙にはふち取りがない」ことに気づき、線を描かずに陰影だけで描いたのが私一人だったので、後の先生の講評で他の生徒がさんざん非難されました。「そんなら初めから言ってくれば」というクラスメイトの愚痴を聞くと気が重くなりました。

お二人は授業のやり方が正反対で、両角先生の授業で美術が嫌いになった生徒もいたかもしれません。

しかしいずれも鮮明な記憶で私の美術好きの土台になったことは間違いありません。それがいかに自身の人生の幅を広げ、色々な場面で党や議会活動の助けにもなったことを考えると、いくら感謝しても足りません。

砂場先生は、東光会などの美術展で中近東の風景画などで活躍され、2年ほど前に亡くなりました。両角先生は卒業後、残念ながらお会いできていません。

05年9月、稲荷台小OBで作品展を開いたとき、来賓でこられた砂場先生と。立っている右はしがそねはじめ、その隣りが砂場先生。

